

## ヴェサリウスの家計

泉 彪之助

介護老人保健施設 陽翠の里

医学史における解剖学の重要性はいうまでもない。アンドレアス・ヴェサリウスが、近代解剖学を確立した不世出の解剖学者であることも疑いがないであろう。しかしそのことは、ヴェサリウスの生涯を単に解剖学者のそれとして理解することとは同じではない。

解剖学は昔も今も、経済的にもっとも恵まれることの少ない学問である。また後世の評価が、生前の生活に反映するとは限らない。ヴェサリウスの生涯を理解するのに、「解剖学者ヴェサリウス」としてより「生活人ヴェサリウス」とした方がよほど分かりやすい面がある。以下は、ヴェサリウスの経済生活から著者が推定したその経過である。ヴェサリウスに関する通貨単位の記載は、バロンのスペイン語文献に従った<sup>1)</sup>。

### 一、ヴェサリウスの家は裕福だったか

オマリーは、「彼の祖先は資産のある人々で、彼の両親は、息子の教育に財政的な制限を設ける必要がなかった」

と書いてある。<sup>(2)</sup>確かにヴェサリウスはパリ大学へ留学できたし、後で見るとパドヴァ大学における俸給が少なかったのに、『ファブリカ』など、いくつかの出版をすることも出来た。弟フランシスクスも、弁護士になるための教育を受けることが財政的に可能であった。

これには二つの理由がある。代々ハプスブルク家の侍医を勤めていたヴェサリウスの祖先がかなりの資産を持っていたことは想像できる。また前稿で見たように、カール五世によつて嫡出と認められて、父アンドリエスは祖父エヴェラルトの資産とその家に伝わった遺産を相続できた。<sup>(3)</sup>ヴェサリウスが自分の経済生活を考えなければならなくなつたのは、一五四三年に父が亡くなってからである。

ただ著者は、嫡出承認書に *valet (valet) de la chambre* とあつたところから、父アンドリエスをハプスブルク宮廷の下級侍従としたが、これを修正しなければならない文献に遭遇した。ブルゴーニュ公国フィリップ善良公の宮廷画家であつたヤン・ファン・エイクも同じ称号を持つていたことが分かつたのである。<sup>(4)</sup>宮廷画家といつても立場はいろいろで、必ずしも絵だけを描いていたわけではない。スペイン王フェリペ四世の宮廷画家だつたヴェラスケスが、侍従としての雑務に追われて命を縮めた話は有名だし、<sup>(5)</sup>そのヴェラスケスに会つて親交を結んだルーベンスは、マントヴァ公の宮廷画家としての生活と共に、外交官として重要な職務を果たした。<sup>(6)</sup>ヴェラスケスに会つたのも、外交官としての職務でスペイン宮廷を訪れたときである。

ファン・エイクが宮廷画家としてどのような立場であつたか、著者には知識がないが、フィリップ善良公の外交使節も勤めたファン・エイクが、その画業の評価の高さから言つても、下級侍従であつたとは考えられない。この文献の著者河原温は、*valet de la chambre* を家令と訳しているが、<sup>(7)</sup>その訳の当否は別として、意味はこの語の現在の語感よりも上、少なくとも中級侍従以上と考えなければならぬだろう。あるいはこの語は、宮廷の一定の職種を示すものとして使われたのかも知れない。

アンドリエスを下級侍従としたために宮廷薬剤師という地位を重視しなかったが、それなりの重みをもった職であった可能性もある。オマリリーの記載を否定する理由はなさそうである。

## 二、ヴェサリウスがパドヴァ大学を辞めた理由

アンドレアス・ヴェサリウスは、パリ大学を去ってイタリアのパドヴァ大学に来、そこで学位を得るとすぐに解剖学・外科学の教職についた<sup>(1)(2)</sup>。学位取得(卒業)後、すぐに教職につくことができたのは、ヴェサリウスが優秀だったことであろうが、それよりも、この職が希望者の少ない、人気のない地位だったことを示している。ヴェサリウスが受けた給与も、雀の涙ほどの額であった。

ヴェサリウスがパドヴァ大学時代に受けた給与について、一次史料が残っている。後に年俸七〇フロリンに昇給したときのもので、昇給の前の年俸は四〇フロリンであった。当時、臨床の教授の年俸は一〇〇〇フロリン以上であった<sup>(3)</sup>という。

フロリンは、フィレンツェ金貨の単位である。当時は、現在のような貨幣制度がなく、小国や領邦の領主がそれぞれに貨幣を発行していたが、その場合、貨幣に含まれる貴金属の量によって貨幣の価値が決まった。ヨーロッパでは銀貨が基本的な貨幣であったが、経済規模の拡大によって高額の支払いが必要になり、金貨が発行されるようになった。フィレンツェ共和国は、一二五二年、フィオーリーノ(フロリン)金貨の発行を始めるが、このフロリン金貨と一二八五年にヴェネツィア共和国が発行したデユカット金貨が広く用いられ、基準通貨のような役割を果たした。他の国からもフロリンを単位とする貨幣が発行され、フロリンが通貨単位としても用いられた<sup>(4)</sup>。

著者には、当時の大学の給与体系、一般の労働賃金の額、物価水準などが不明なので、あくまで比較でしかないが、ヴェサリウスが薄給であったことは間違いない。今、仮に臨床の教授の俸給を月給五〇万円とすると、ヴェサ

リウスの初任給は二万円、昇給して三万五千円ではない。これでは生活もできないくらいの額である。後にヴェサリウスが『ファブリカ』の出版によって有名になると、大学は年俸をもっと上げるが、それでも二〇〇フロリン<sup>(2)</sup>、月給に換算すると一〇万円である。これでは生活はようやくできるかも知れないが、家族を持つことなど思いもよらないであろう。ヴェサリウスが大学を去ってハプスブルク家の侍医になったのは、この大学での薄給のためではなかったらうか。

ヴェサリウスが大学を去ったもう一つの理由は、先に述べたように一五四三年に父アンドリエスが亡くなったことである。製版などかなりの費用を要したと思われる『ファブリカ』や『エピトメ』の出版が可能になったのは、恐らく父アンドリエスの援助があったからであろう。生活も、父のおかげで支えられたと思われる。しかしその父を失い、母イサベルが残ったとなつては、たとえ長男ニコラスに直接的な扶養の義務があるといつても、実家からの援助は望めなかつたらう。経済的に自立し、家族を養うためには、もつといい収入を得る必要があつた。そこで父アンドリエスの跡をついでハプスブルク家に仕え、侍医になつたのである。ブリュッセルの立派な家から配偶者を迎えることが出来たのも、ハプスブルク家の侍医という将来が約束されたからであろう。

### 三、フィレンツェ公コジモによるヴェサリウスの招請条件

ヴェサリウスは、『ファブリカ』の出版後、ハプスブルク家の侍医となるまでに、ポローニアとピサで解剖示説と講義を行い、フィレンツェ公コジモ・デイ・メデイチ（後のトスカナ大公コジモ一世）からピサの大学に招かれたが、すでにカール五世の宮廷に入ることが決まっていたので断つた。この経緯について改めて報告する予定だが、フィレンツェ公コジモは、フィレンツェ公国、後にトスカナ大公国を学問・芸術で名のある土地にする方針で、多くの文人・芸術家を招いた。<sup>(10)</sup> ヴェサリウスについても、ピサの大学に招聘するにあたって、八〇〇コロナの年俸を

提示したといわれる。<sup>(1)(2)</sup>

一五三七年、カール五世はエスクド金貨を発行し、これがスペイン王国共通の通貨となった。このエスクド金貨はコロナ貨とも呼ばれた。フロリン金貨は重さ三・五四g、品位ほぼ純、エスクド金貨は重さ三・三八g、品位千分中九一六・六で、これから単純に計算すると、コロナという貨幣単位はフロリンのほぼ八七%になる。すなわち八〇〇コロナは約七〇〇フロリンである。この貨幣価値では、ヴェサリウスが受けるべき年俵は月給に換算して約三五万円になり、パドヴァ大学の臨床教授の年俵の一〇分の七で、三〇才の若い解剖学者としては破格の待遇である。ヴェサリウスなればこそで、ヴェサリウスが断って別の人がその職を受けたときは、年俵はヴェサリウスへの申し出よりも低かった。<sup>(1)(2)</sup>

フィレンツエ公コジモは、カール五世と政治的に特別に近い関係にあった。コジモ自身が通貨を発行しているが、その中にエスクド貨(コロナ貨)があり、前記の申し出はそれを用いたものであろう。

#### 四、ヴェサリウスのパドヴァ大学との再交渉

ヴェサリウスが、晩年、スペインを去って聖地巡礼に赴いた理由は明らかでない。恐らく直接の動機は、ファロピウス亡き後のパドヴァ大学の解剖学教授の後任となることであつたろう。またそうした関心を持たせた背景には、フランドル派の廷臣が重視されたカール五世時代に比べ、スペイン派の廷臣が力を持ったフェリペ二世の宮廷の空気があつたと思われる。<sup>(1)</sup>よくいわれるヴェサリウスが解剖した遺体の心臓が動いていたというのも、スペイン派の流した流言かもしれない。しかし退職後のポストについて交渉するという理由は表に出せないで、だれも反対のしようがない聖地の巡礼という理由を持ち出したのでないだろうか。

この交渉は、はじめから難しい情勢にあつた。パドヴァ大学にしてみれば、以前解剖学の有名な著書を出したと

いっても、二〇年近くも解剖学から遠ざかり、臨床家として過ごしていた人である。時には解剖も行っていたが、アンリ二世の例に見るように、しばしば病理解剖に近いものであった。果たして解剖学の講座を担当できるか疑念があつたらう。一方でヴェサリウスは五〇歳であり、永くハプスブルク家の侍医を勤め、宮中伯の称号まで得た。それなりの報酬を出さなければならぬという条件もあつた。

ヴェサリウスにとつても、二〇年近くも解剖学から離れていて、解剖学を十分に教えられるか自信がなかつたに違いない。いずれにしても、双方にとつて腰の引けた交渉であつた。

スペインを出発後、フランスまではアンネ夫人、令嬢アンネも一緒に来たが、けんか別れして二人はブリュッセルに帰つてしまい、ヴェサリウスのみがヴェネツィアを訪れ、聖地に旅立つた。<sup>(2)</sup> まつたくの想像だが、パドヴァ大学の提示した報酬が、夫人にとつて見ればハプスブルク宮廷時代の収入に比べて少なすぎたのではないだろうか。ヴェサリウスは、それでもパドヴァ大学の地位を受けたいと思つたが、夫人は反対で、それでけんか別れすることになつたのではないかとというのが著者の推定である。

ヴェサリウスがハプスブルク家の侍医時代に受け取つていた報酬について、直接的な史料はないが、資産三万リラ、収入五〇〇〇リラ、あるいは資産一万フロリン、収入三〇〇〇フロリンという数値が上げられている。<sup>(3)</sup> 後のべるようにこのころ物価が変動しているし、給与以外の収入も含まれているので単純に比較はできないが、数値だけ見るとパドヴァ大学の最後の年俸に比べて収入は十五倍になる。再就職しても、パドヴァ大学は三〇〇〇フロリンというような給与は出せなかつたに違いない。夫人にとつて、夫の医学上の業績よりも、夫が受け取つてくる報酬の方が重要だつたことは、家計を預かる妻としては当然の感覚であつたらう。

もつともけんか別れしたのはヴェネツィアに着くずっと前なので、夫人が怒つたのは、ハプスブルク家の侍医をやめるといふヴェサリウスの意向だつたかもしれない。宮廷の空気を知らない夫人は、多額の報酬が約束された職

を捨てるといふ、夫の決断を支持できなかつたであろう。

## 五、ヴェサリウス逝去後の家計

ヴェサリウスの逝去後、アンネ未亡人は亡夫の雇い主であつたスペイン王フェリペ二世に、娘の婚資として年金と補助を受けることを願ひ出た。フェリペ二世は、この願ひを当時ネーデルラント摂政を務めていたパルマ公妃に伝えた。パルマ公妃は、財政状態から年金は出せないとしたが、フェリペ二世は、ヴェサリウスと父アンドリエスの生前の功績に対して年二〇〇フロリンの年金を与えた。<sup>(1)(2)</sup>

当時ネーデルラントはフェリペ二世の支配下にあり、フェリペ二世は通貨としてダールダー・シリーズを導入したが、カール五世に倣つた通貨も発行した。<sup>(3)</sup> ダールダー・シリーズはおもに銀貨なので、フロリンを単位とした年金を与えたのであろう。

ヴェサリウス未亡人の願ひをどう理解するか、見方によるのでないだろうか。ヴェサリウスを失つてハプスブルク家侍医・宮中伯としての固定収入がなくなつた夫人は、不安であつたに違ひない。収入五〇〇リブラあるいは三〇〇フロリンという数値は、ヴェサリウス在世中のものである。ブリュッセルにおけるヴェサリウスの屋敷は、一軒家というよりビルといつた方がいいような大きさで、これを維持するには相当の出費が必要であつたろう。永くハプスブルクの宮廷に仕えたのだからという、今の公務員や会社員が共済年金や厚生年金を受ける感覚に近いものがあつたかも知れない。未亡人が、資産があつても年金を望んだのは、ある程度自然でなかつたかと著者には思える。

ただこのころはヨーロッパでは物価が上昇している時期(一五四〇年から百年の間に、物価が六倍になつたとされる<sup>(4)</sup>)なので、年金の額を単純にヴェサリウスのパドヴァ大学における年俸と比較できないであろう。ヴェサリウ

ス未亡人が年金を受けたのは、ヴェサリウスがパドヴァ大学に就職して三〇年ほど後であった。

(この論文の要旨の一部は、平成一七年六月、第一〇六回日本医史学会総会で発表した)

### 参考文献

- (1) José Barón Fernández: Andrés Vesalio, Su Vida y Obra (アンドレアス・ヴェサリウス、その生涯と業績)、Comunsejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid, 1970
- (2) チャールス・D・オマリー著、坂井建雄訳『プリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス 一五一四—一五六四』、エルゼビア・サイエンス ミクス、東京、二〇〇一年
- (3) 泉 彪之助「ヴェサリウスの父アンドリエスの、神聖ローマ皇帝カール五世による嫡出承認書」『日本医史学雑誌』五二巻二号、二〇〇六年
- (4) 泉 彪之助「スペイン宮廷のヴェサリウス」『日本医史学雑誌』五〇巻四号、二〇〇四年
- (5) 河原温『プリュージュ』一三二頁、中公新書、二〇〇六年
- (6) 佐竹謙一『浮気な国王フェリペ四世の宮廷生活』、岩波書店、東京、二〇〇三年
- (7) 西川和子『スペイン宮廷物語』、彩流社、東京、二〇〇三年
- (8) A・モラル著、島田一夫訳『巨匠の絵画技法ルーベンス』一四頁、エルテ出版、東京、一九九一年
- (9) 久光重平『西洋貨幣史・中』、国書刊行会、東京、一九九五年
- (10) 北田葉子『近世フィレンツェの歴史と文化—コジモ一世の文化政策(一五三七—一六〇一)—』、刀水書房、東京、二〇〇三年
- (11) ジョナサン・ウイリアムズ編、湯浅赳男訳『図説お金の歴史全書』二四二頁、東洋書林、京都、一九九八年